COLUMN

若い世代の活躍に期待



東洋大学副学長
国際地域学部教授
北　脇　秀　敏
KITAWAKI Hidetoshi

84年、日本上下水道設計（株）、90年世界保健機関本部環境保健部を経て92年東京大学工学部都市工学科国際環境計画（クボタ）講座客員助教授。96年東洋大学国際地域学部設置要員（教授）を経て97年東洋大学国際地域学部教授（現在に至る）、11年より東洋大学副学長。開発途上国の環境改善分野のODA案件に数多く参加するとともに環境分野の青年海外協力隊員の育成に努め09年JICA理事長表彰を受ける。

「このままでは日本はだめになる」。先行きに不安を抱く中高年の経済人や知識人がよくロにする言葉である。しかしこのようなことは筆者が物心ついたころから言われていたように思う。なにやら「最近の若い者は」という言葉が古代から言われているのと似ている気がする。日本の先行きに不安を感じるのは、日本が世界の動きについて行けるのであろうかという不安が原因になっているのであって、実は過去の経験を引きずっている中高年の方こそが強く抱く持つ不安ではないだろうか。

現在の中高年は高度経済成長やバブル期の環境に自分たちを適応させ、その中で能力を発揮できる人材に育ってきた。しかし業界を取り巻く環境は刻々変化している。特にグローバル化した社会は、日本人としてのアイデンティティと国際的な知識、コミュニケーション能力など幅広い能力を持つ人材を要求する。現在の社会への適応力は、過去の環境に適応した中高年より、若年層の方が数段上だろう。中高年層は、自分たちが苦労して築きあげた成功モデルに固執するのでなく、若者の発想力を最大限に活かすことで現在の社会情勢を乗り切るべきではないだろうか。既存のシステムを変えるのに抵抗し、「最近の若い者は」と中高年が言うと、かえって日本をだめにしてしまう恐れすらある。

世代間闘争、という言葉もあるが、中高年の経験と若年層の柔軟性とを活かす「世代間共生」が必要だろう。これからの時代に必要とされる人材は過去の時代に育った世代から見ると異人種と映るかも知れない。しかし、かつて「新人類」と呼ばれていた世代が今の社会を動かしている。「最近の若い者」と呼ばれる人こそが試行錯誤しながら新しい社会に適応し、次世代を担う人材となれるかも知れない。

世界の動きに対応して、国もグローバル人材の養成に本腰を入れている。「最近の若い者」の教育現場である大学では、若い世代からエネルギーをもらいながらその最前線で人材の養成を行っている。その若者たちからは「このままでは日本はだめになる」という声は聞こえてこない。